

私が見た「従軍慰安婦」の正体

小野田自然塾理事長 ●おののだひるお 小野田寛郎

首相の靖国神社参拝や従軍慰安婦の問題は、全く理由のない他国からの言いがかりで、多くの方々が論じているところだ。南京大虐殺と同様多言を弄することもあるまいと感じていたのだが、未だに妄言・暴言が消え去らない馬鹿さ加減に呆れている。

戦後六十年、大東亜戦争に出征し戦場に生きた者たちが少なくなりつつある現今、私は証言として、「慰安婦」は完全な「商行為」であったことを書き残そう

と考えた。

外地に出動して駐屯する部隊にとって治安維持と宣撫工作上最も障害になる問題は、兵士による強姦と略奪・放火である。そのためにとこの国もそれなりの対策を講じていることは周知の通りである。大東亜戦争時、戦場には「慰安婦」は確かに存在した。当時は公娼が認められている時代だったのだから至極当然である。野戦に出征した将兵でなくとも、一般に誰でも「従軍看護婦」と言う言葉は常

識として知っていたが、「従軍慰安婦」と言う言葉は聞いた者も、また、使った者もいまい。私も聞いたことがない。それは日本を貶める為に後日作った造語であることは確かだ。

淫らな言葉だが、中国戦線では「ツンコ・ピー」「チョウセン・ピー」と呼んでいた筈であるが、そのことは、誰も他の人の見ている所でする筈のないことだけに、仲間どうしの話はおからさまでも、公衆の面前で手柄顔に大声でこと細

かに話せる者はまずいだろう。陰で笑う者にされるのが落ちだからだ。

そのためか「慰安所」のことも「慰安婦」のことも、公の場で自己の見聞を正確に発表する人が少ない。「ピー」は中国戦線で、兵士たちが隠語として使ったのだが、語源は中国語で戦場からの帰還兵から日本内地にも伝わっていた。曰く「ピー買い」である。

それはともかくとして、あまり詳しいと「よく知ってるね」と冷笑されるのが

小野田寛郎氏 大正十一年（一九二二年）和歌山県で生まれる。旧制海南中学を卒業後、貿易商社に就職。中国の漢口（現在の武漢）に渡る。昭和十九年、久留米第一予備士官学校に入学。同年、陸軍中野学校二俣分校に入り、その年の十二月にフィリピンへ。同四十九年三月に帰国するまで作戦解除命令を受けることもなく任務を遂行。その三十年間は著書「たった一人の三十年間」「わが回想のルパン島」に詳しく描かれている。同五十年、ブラジルで牧場経営を始める。同五十九年、福島県で小野田自然塾を開講。以来、八十二歳のいまもキャンプを通じて子供たちとのふれあいを続けている。新著に「君たち、どうする？」（新潮社）がある。

落ちだろう。「では何故、君は」と私に聞かれるだろうが、幸い私はその実態を外から観察出来る立場にあったから、何も臆することなく、世の誤解を解くために発表することが出来るのだ。

漢口の「慰安所」を見学

私が初めて「慰安婦」という言葉を聞いたのは「慰安所」からだ。商社員として十七歳の春、中国揚子江中流の漢口（現武漢）に渡った私は、日本軍が占領してまだ五カ月しか経っていない、言わば硝煙のおいが残っている様な街に住むことになった。

当時、漢口の街は難民区・中華区・日華区・フランス租界・日本租界・第一特別区（旧ドイツ租界）・第二特別区（旧ロシア租界）・第三特別区（旧英国租界）に分かれていて地区ごとにそれぞれ事情に合った警備体制が敷かれていた。日本兵の歩哨や憲兵、安南兵の歩哨

（フランス租界）、中国人の巡查もそれぞれの場所に立っていた。日華区とは日本人と中国人とが混じって住んでいる地区で、そこに住む中国人は中華区に住む者と同様「良民証」を携帯しており、そうでない者は警備上難民区に住まされていた。難民区は日本兵も出入りを禁止されていて、私たちが在留邦人は届け出て許可を得なければ出入り出来なかつた。それだけ危険な場所だった。

私は、仕事が貿易商だから、難民区以外はよく歩いた。だから地理はすぐ詳しくなっていたが、ある日、汚れた軍服を着た兵士に「慰安所はどこか知りませんか」と路上で尋ねられ、一瞬思い当たらず戸惑った。しかし看板に黒々と「漢口特殊慰安所」と書いて壁に掲げていて、その前に歩哨と「憲兵」の腕章をつけた兵隊が立っている場所を思い出したのでその通り教えてあげた。映画館と同様に日華区にあった。汚れた軍服から推測して、作戦から帰ってきた兵士に間違いない。街を警備している兵士は、そんな汚

れた軍服で外出してないからだ。

私は「特殊慰安所」か、なるほど作戦から帰った兵士には慰安が必要だろう、小遣い銭もないだろうから無料で餅・饅頭・うどん他がサービスされるのだからと早合点していた。

ところが、私の知人が営む商社は日用品雑貨の他に畳の輸入もしていて、それを「慰安所」にコンドームなどと一緒に納入していたので「慰安所」の出入りが自由であった。彼に誘われて一般在留邦人が入れない場所だから、これ幸いと見学に行った。

漢口の街の大通りには、ところどころ入り口の壁に「〇〇洞」、「〇〇里」と書かれた横丁がある、日本の裏長屋に相当する住宅街である。先に私が兵隊に教えられた場所の名は「積慶里」であった。

私たちは、憲兵に集金の用件を話して中に入ってまず仕事を済ませた。日が暮れていたので「お茶っぴき」（客の無い暇な遊女）が大勢出てきて、経営者と私たちの雑談に入ろうとしてきたが追い払

われた。そこには内地人も鮮人も中国人もいた（現在、鮮人は差別用語とみなされ、使われない。しかし朝鮮半島が日本統治だった当時は「日本人、朝鮮人」などと言おうものなら彼らに猛烈に反駁された。彼らも日本人なのだからと言う理由である）。群がってきた彼女たちは商売熱心に私たちに媚びてきた。憲兵は特別な事情の時以外は、部屋の中まで調べに来る訳ではないからである。


料金は女性の出身地によって上中下がある。また、利用時間も兵士は外出の門限が日没までだから日中に限られるが、下士官は門限が長く、将校になれば終夜利用出来る。料金も同額ではない。階級の上の方が割高で、女性たちは当然、同じ時間で多く稼げることになる。

半島出身者に「コチヨ（伍長）下士官」かと思つたらヘイチョウ（兵長）兵士）か、「精神決めてトットと上がれネタン（値段）は寝間でペンキョウ（勉強）する」とか、笑うどころではない涙ぐましいまでの努力をしているのも聞いて

新館 夢大地

国生み神話の 淡路島

夢みる大地が ここにある。



収容750名様・131室

国立公園 淡路島 洲本温泉
政府登録国際観光旅館・日本観光旅館連盟

ホテルニューアワジ

〒656-0023 洲本市古茂江海岸 TEL (0799)23-2200 0 FAX (0799)23-1200

た。内地人のある娼妓は「内地ではなかなか足を洗えないが、ここで働けば半年か一年で洗える」といい、中には「二日に二十七人の客の相手をした」と豪語するつわものもいた。

「内地人も出身地の異なる他の女の子も、体力的に大差がない筈なのに、内地人は兵士たちと言葉が通じるために情が通うのか、本気でサービスして商売を忘れ、健康を害してしまう。そのために送り返さねばならず、経営者にとって利益が少くない。兵隊さんには内地人ばかりで営業するのが本当だが」と本音を漏らしていた。

があつた。というのは彼女たちは数人で外出してくるのだが、民族衣装ではなく着慣れないツイピースの洋装のせいで着こなしが悪く、また歩き方にも特徴があつて一目で見分けられた。スカートの下から下着の裾が覗いている人も多かった。なにかユーモラスだったが、そんなことに関係なく彼女たちは実に明るく楽しそうだった。その姿からは今どきおおげさに騒がれている「性的奴隷」に該当する様な影はどこにも見いだせなかった。

確かに、昔からの言葉に「高利貸しと女郎屋の亭主は畳の上で往生出来ぬ」というのがあつた。

「前借」と形は変わったが、娘にとっては売り飛ばされたことと変わりはなかった。先述の「足を洗う」とは前借の完済を終えて自由の身になることを言うのだが、半島ではあくどく詐欺的な手段で女を集めた者がいると言う話はしばしば聞いた。騙された女性は本当に気の毒だが、中にはこんな話もある。「従軍看護婦募集」と騙されて慰安婦にされた。私は高等女学校出身なのに」と兵士や下士官を涙で騙して、規定の料金以外に金をせしめているしたたかな女もいた。またそれを信じ込んでいた純な兵士もいたことも事実である。日本統治で日本語が通じた故の笑えない喜劇でもある。

日露戦争(一) 国際的文脈

軍事史学会編 四二〇〇円

軍事史学会40年の蓄積を投入した

日露戦争百年の総合的研究

近代日本の進路と20世紀の潮流を方向付けた世界的事件に政治、外交、軍事、国際法、経済、社会文化の各方面から多角的かつ複眼的に迫る。

序言 日露戦争一〇〇年 軍事史学会四〇年

第一編 序言 軍人歴史家と純粋歴史家

第二編 衝突への序曲 ウィットの極東政策の破綻と開戦への道 日露戦争とロシア正教会イデオロギー / 日清戦後後継期の軍事支出と財政政策 / 明治33年艦隊部将校作業書と日露戦争

第三編 政治と外交 日露戦争と中国の中立問題 / ポーツマス講和会議・幻の清國使節団 / 日露戦争と日英王室外交 / 広報担当大使としての末松謙澄 / ソフト・パワー、ハード・パワー / 史料紹介:アーネ

第三編 法と経済 日露戦争における国防法の発信 日露戦争とフランスの対ロシア借款 / 日露戦争とフランスの対ロシア借款 / 日露戦争とフランスの対ロシア借款 / 日露戦争とフランスの対ロシア借款

第四編 研究史と史料 日露戦争に関する最近の欧米の研究 / 防衛研究所蔵の日露戦争関連史料 / アジア歴史資料センター所蔵の日露戦争史料について

※(二)はH17年5月発行予定(全二巻)

錦正社

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町544-6

☎03-5261-2891 FAX03-5261-2892

http://www.kinseisha.jp/

ところで、その「慰安所」にどれだけの金が流れたのだろうか。これが「慰安婦」が「商行為」であった確かな事実である。私の次兄が主計将校で、漢口にある軍司令部に直接関係ある野戦衣糧廠にいたので「慰安所」について次のような統計があると教えてくれた。

当時、漢口周辺には約三十三万人という兵力が駐屯していたが、ある理由で全軍の兵士の金銭出納帖を調べた。

三分の一が飲食費、三分の一が郵便貯金、三分の一が「慰安所」への支出だった。

貯金をすることは、給料の僅かな兵士たちにとつてあまり嬉しいことではなかったが、上司から賤として教えられている手前、せざるを得なかったのが実情だった。

私も初年兵として一ヶ年、江西省南昌にいたが、食べたのを我慢して貯金していた。

一人の兵士がそれぞれ三等分して使った訳ではないだろうが、人間の三大欲は食欲、睡眠欲と性欲と言われるだけに、

貯金を睡眠に置き換えると全く物差しで測った様な数字である。

ちなみに当時の給料は兵は一カ月平均十三円程で、その三分の一を約四円として計算すると三十三万人で総額約百三十二万円になる。「零戦」や「隼」といった戦闘機一機の価格は三万円と言われたが、実に四十四機分にも相当する。サラリーマンの初任給が四十円そこそこの頃だったのだから、経理部の驚くのも無理のない話である。

以上が、私が商社員として約三年半の間、外部から眺め、また聞き得た「慰安所」と「慰安婦」の実態である。私が漢口を去った昭和十七年夏以降に、漢口兵站（作戦軍の後方にあつて車両・軍需品の前送・補給・修理、後方連絡線の確保などに任ずる機関）の副官で、「慰安所」等を監督した将校の著した『漢口兵站』と照合してみたが、地名・位置等について多少の相違点は見いだしたが、本題の「慰安所」について相違はなく、より内情が詳しく記されていた。

これでは誰がどう考えても「商行為」であるとは言いようがないだろう。「商行為」ではない、軍による「性的奴隷」であるとそれでも強弁するとすれば、知らな過ぎるのか、愚かで騙されているのか、そうでなければ関西人が冗談めかして言う「いくらか貰てるの？」なのかもしれないが、あまりにも馬鹿げた話である。

問題にして騒ぎ出す者たちの狙い

次に、軍閥との暴論について証言する。私は二十歳で現役兵として入隊、直ちに中支の江西省南昌の部隊に出征した。

初年兵教育が終わって作戦参加、次いで幹部候補生教育、途中また作戦と丁度一ヶ年一度の外出も貰えずに久留米の予備士官学校に入校してしまつたから、外出して「慰安所」の門を潜る機会に恵まれなかつた。

だが初年兵教育中、古い兵士には外出

がある。外出の度にお土産をくれる四年

兵の上等兵に「外出でありますか」と挨拶したら「オ、金が溜つたから朝鮮銀行に預金に行くんだ」と笑って返事をしてくれた。周りは周知の隠語だからクスリと笑うだけだった。南昌には師団司令部があつた。「慰安所」には内地人も朝鮮人も中国人もいて、兵士は懐次第で相手を選んで遊んだのだろう。

私は幹部候補生の教育を、南昌から三〇キロ以上も離れた田舎の連隊本部で受けた。「慰安所」は連隊本部の守備陣地の一角に鉄条網で囲まれて営業していた。教育の末期に候補生だけで本部の衛兵勤務につくことになった。もちろん勤

務は二十四時間である。

私は営舎係だったので歩哨に立たないから何度も歩哨を引率して巡察に出た。巡察区域の中に「慰安所」も含まれていた。前線の歩哨は常時戦闘準備をしていた。兵舎内の不寝番でさえ同様だ。鉄帽を被り、銃には弾を装填し夜間はもちろん着剣である。その姿で「慰安所」の周囲だけならまだしも、屋内も巡察し、責任者の差し出す現在の利用者数の記録を確認する。軍規の維持とゲリラの奇襲攻撃を警戒しているからである。

考えてみるまでもない、そこで遊んでいる兵士は丸腰どころではない。もつと無防備で不用心な姿である。その将

兵を守るべき責任は部隊にあるのは当然だ。それに性病予防の問題もある。そんな田舎に医師や病院がある筈がない。性病予防のため軍医や衛生兵が検査を実施するしかない。「慰安所」の経営者は中国人だつたし、日本では当時公認の娼妓と呼ばれた女たちも中国人だつた。彼らも食料やその他の生活用品が必要だ。大人数なのだから、それなりの輸送手段もいる。辺鄙な場所だから部隊に頼る以外方法がない。部隊が移動する時もそうなるだろう。

私の話す湖北省の言葉も、だいたい江西省でも通じたので、経営者と立ち話をして彼女たちについてそれなりの様子も

「和装教室」で学ぶ、日本の心。

日本財団の助成による「中・高校生の和装教室」が各地で開催されています。年に20回をこえる授業では、着物の着付けなどを題材に伝統的な礼儀作法を教え、日本人が大切にしてきた和の文化や思いやりの心を身につけてもらうための育成を続けています。

お問い合わせ先／(社)全日本きものコンサルタント協会 03(3219)3015

日本財団は「和装教室」を支援しています。
日本財団
 The Nippon Foundation
日本財団は、世界の善い上りより3.3%を寄付して活動しています。
www.nippon-foundation.or.jp/



聞き出せた(勤めてくれるお茶は飲まなかったが、少々守則違反だ)。今でも「慰安所」の両側に部屋のある中廊下を巡察した不粋な自分の姿を思い出すが、こんな漫画にもならない風景が現実にあったのだ。これは私の部隊だけではないと思う。

もう六十年も昔のことである。時代が変わり、また平時と戦時の違いもある。したがって娼妓(ここでは慰安婦に相当する)に対する解釈も当然変化している。そうであるにもかかわらずに証拠も不完全になっていることを幸いに、今更これを問題にして騒ぎ出す者たちの狙いは何なのか。言えることはただ一つ、不完全だからこそ喚き散らしていれば、何かを得られると狙っているということだ。

戦場に身を曝し、敵弾の洗礼を受けた者として最後に言っておく。このことだけは確かだ。野戦に出ている軍隊は、誰が守ってくれるのだろうか。周囲がすべて敵、または敵意を抱く住民だから警戒を怠れないのだ。自分以上に強く頼れるものが他に存在すると

も言うのならまた話は別だが、自分で自分を守るしか方法はないのだ。

軍は「慰安所」に関与したのではない、自分たちの身を守るための行為で、それから一歩も出ていない。

「異常に多く実を結んだ果樹は枯れる前兆」で「種の保存の摂理の働き」と説明されるが、明日の命も知れぬ殺伐とした戦場の兵士たちにもこの「自然の摂理」の心理が働くと言われる。

彼らに聖人君子か、禅宗の悟りを開いた法師の真似をしると要求することが可能なのだろうか。現実には少ない給料の中から、その三分の一を「慰安所」に持って行ったことで証明されている。有り余った金ではなかったのだ。

「兵隊さん」と郷里の人々に旗を振って戦場に送られた名譽の兵士も、やはり若い人間なのだし、一方にはそうまでしてでも金を稼がねばならない貧しい不幸な立場の女性のいる社会が実際に存在していたのだ。買うから売るのが、売るから買うのかはともかく、地球上に人間が存

在する限り、誰も止めることの出来ないこの行為は続くだろう。根源に人間が生存し続けるために必要とする性(さが)が存在するからだ。

「従軍慰安婦」なるものは存在せず、ただ戦場で「春を売る女性とそれを仕切る業者」が軍の弱みにつけ込んで利益率のいい仕事をしていたと言っただけのことである。こんなことで騒がれては、被害者はむしろ高い料金を払った兵士と軍の方ではないのか。

小野田寛郎氏の近況

十一月十九日夕刻、東京・虎の門で小野田寛郎氏の帰還三十周年記念を祝う会がひらかれました。すでに八十を越えた小野田氏ですが、三十年前と同じように背筋をびんと伸ばし、いまなお若々しさを失わずに元気いっぱいでした。

この会の案内状に、「八十二歳となられた現在も、日本の現状に想いをいたし青少年の健全育成を自らの天命と悟られ、今なお粉骨砕身、東奔西走するそのお姿こそ我々が尊敬してやまない愛国の士、最後のサムライの姿であります」と

書いてありました。間近で見ると小野田氏にはたしかにサムライの風格を感じさせるものがあります。

平成十六年は小野田氏にとって大きな節目の年でした。フィリピンのルバン島から三十年の戦争を終えて帰還して以来、三十年。ブラジルに移住し原野を切りひらいて牧場経営に着手して以来、三十年。日本の子供たちのために役立ちたいと小野田自然塾をひらいて二十年。その間、キャンプなどを通じて約二万人の子供たちとふれあうことができたそうです。

小野田氏は自然塾で実践する「野性の指導」のすべてを本にまとめて刊行しました。『君たち、どうする?』(新潮社)

ですが、そのなかでブラジル移住を決意したときの心境についてつぎのように述べています。

「新天地での開発には、十年間かける計画でした。ルバン島では六十歳まで戦って戦場で散る覚悟だったのが、幸運にも戦死もせず五十二歳で生還できたのですから、その残りの歳月を投じようと考えたのです。体力の限界の第一段階を六十歳と考え、その年まで戦場と同じように命がけて取り組もうと思いましたが」

小野田氏の五十二歳からの再出発は、日本人に勇気を与えてくれました。そしてこの日、小野田氏は、「あと五年、いや十年はがんばらうと思っています」と、あいさつしました。

遊就館

靖国神社

遊就館には、「ゼロ戦」や人間魚雷「回天」の兵器、お手紙、ご遺影を展示しております。愛する国・郷土・家族のために英霊の御心に触れて下さい。皆様のご来館をお待ちしております。

拝観料
大人 800円
大学生・高校生 500円
中学生・小学生 300円
団体2割引(20名以上)

開館時間 9:00 ~ 17:00

休館日 年中無休

最寄駅 市ヶ谷、飯田橋、九段下駅

お問い合わせ先
靖国神社遊就館
03-3261-8326
ホームページアドレス
http://www.yasukuni.or.jp